

—田端光美教授のご退職を迎えて—

社会福祉学科 学科長 谷 口 政 隆

田端光美先生が本年3月末日をもって定年退職されることになりました。日本女子大学社会福祉学科の大きな力が失われるような思いがいたします。

もう10年以上前になりますが、ふと先生の生活信条はどんなものですかとお尋ねしましたら、即座に「誠心誠意」という言葉が帰ってきました。以来、まさにこの信条そのもので物事に対処されるお姿を見続けてきました。

田端先生は1955年に日本女子大学附属農家生活研究所助手としてお仕事を始められてから今日まで、そのほとんどの年月を日本女子大学のために費やされてきました。それも、あらゆることに誠心誠意、尽くされてこられました。

まず最初に、このことについて心から感謝申し上げます。

また、毎年平均して1・2冊出される著作に加えていくつもの論文。大学や学科の運営に携わりつつ、その一方でこうしたお仕事が今日までずっと続くことに驚かされます。ご研究も社会福祉のあらゆる領域にわたり、その関心領域の広さと豊かさは大変なものです。

さらに社会的な活動では、大学設置・学校法人審議会委員、文部省学術審議会委員、社会福祉士国家試験委員、また各地の社会福祉審議会委員や数えきれないほどの各種の委員会でお役目を果たされています。

加えて学会に関しては、特に日本社会福祉学会、日本地域福祉学会の理事としてその運営に尽力され、2000年という記念すべき年にあたる日本社会福祉学会第48回大会は日本女子大学が開催校となり、その実行委員長をつとめられるなど、学会活動そのものも支えてこられました。

そうしたことから社会福祉の研究教育者の数多くを知悉されており、慕われ、田端先生の示唆で著書を書かれたり、新しい職に就かれた方々が私の知る限りでも相当数いらっしゃいます。

こうして限りないような広がりの中で、まったく疲れも見せずご活躍を続けられる先生が去られるということは、いかにご定年とはいえ惜しまれてなりません。日本女子大学のために、そして社会福祉学科のために、本当にありがとうございました。言葉に尽くせぬお礼を申し上げ

げます。

また、来年は社会福祉学科創設80周年にあたります。この歩みのまとめに取り組まれておられますが、このことも含めまして今後なにかとお力をお貸しくくださいますようお願い申し上げます。

先生は、最終講義を「日本の地域福祉の展開とその特質」でしめくられました。今後さらにご研究と教育をご健勝にて展開されますことを心からお祈りします。

—増野 肇教授のご退職を迎えて—

社会福祉学科 学科長 谷 口 政 隆

増野肇先生が本年3月末日をもって定年退職されることになりました。わたしたちは、増野先生の風格にもご著書にも常に文学者のような雰囲気を感じておりましたが、1955年千葉大学英米文学科を卒業されておられることを知り、なにか納得したような気分になりました。その後、東京慈恵会医科大学に進まれなかったら、ドラマ作家をされていたのではないかなど勝手に想像してしまいます。

また、先生は精神科の臨床医として社会的な動向に目を配られるだけでなく、家族会やセルフヘルプグループと共に広範な活動を進めてこられました。そして社会福祉を学ぶ者の中に一体となり、わたしたちの教育研究に刺激をあたえ、また学科の運営にとっても柔らかな雰囲気を加え、時には無意識のうちに学科の臨床医のような役割も果たしてくださいました。社会福祉学科で温もりのあるお人柄に日常的に接する機会が無くなるのはとても淋しく思います。

1959年、精神科医となられた先生は、慈恵医大精神神経科と初声荘病院で森田療法、サイコドラマ、集団精神療法を学ばれ、臨床医として約16年間ご活躍されました。ここでは、治療共同体、そしてセルフヘルプグループの役割と意義にいち早く着目され、具体的な活動を始めておられます。

また1975年に栃木県精神衛生センター所長に就任されたことを契機として、地域精神衛生活動を真正面からとりあげられ、先生の言葉をお借りしていえば「地域のキーパーソンであるソーシャルワーカーを育てる」ことにも力を注がれるようになりました。それが1986年からの宇都宮大学教育学部教授としての教育の世界に移られる動機だったのではないのでしょうか。

そして1991年から10年間、日本女子大学の社会福祉学科での教育研究の任に就いて下さいました。こうした蓄積のもとで学生の教育をしていただけて、わたしたちは本当に恵まれていたと思います。そして、増野先生が社会福祉学科にいてくださったことを誇りとします。

これからも大学教育の場でご活躍されることを伺い、ご健勝にて、さらに多くのすぐれたソ

ーシャルワーカーをお育てくださるようお願いいたします。

わたしたちは、先生の現実に足を踏み入れながら、その根底にいつも明るい展望あるいはロマンを宿している教育研究にふれさせていただきました。本当に、ありがとうございました。これまでの卒業生と共に厚くお礼を申し上げます。

いつまでも、お元気でご活躍下さいますよう心からお祈りいたします。